

微生物がミツバチを守る

宮崎大学農学部の前田昌調（まさちか）教授（微生物学）が、宮崎県小林市で採取した微生物の新種細菌に、ミツバチの伝染病を抑制する効果があることを突き止めた。ウイルス抑制やストレス軽減などへの効果もある。現在、世界的に深刻化している「蜂群（ほうぐん）崩壊症候群」の抑制につながるものとしても注目される。
（みやざき）



前田教授

田教授らがDNAを解析した結果、シウドモナス属の新種細菌であること

病原菌の増殖抑制 飼料化に期待

新種の細菌発見

学 大 宮 崎 前
教 田 前

前田教授は研究成果を近く、英国の応用微生物学会誌に発表する。この微生物は土壌や淡水などに広く分布している自然細菌群の一種。前田教授は、ここから微生物が分かった。小林市内の水田横のわき水池がミツバチの水飲み場になっていて、この病原菌の増殖抑制を調べたところ、短時間で72〜80%の高い抑制効果が見られた。

前田教授は日本養蜂協会（東京）の委託で2005年から、ミツバチ伝染病予防の研究に取り組んできた。テーマは幼虫が腐蛆（ふそ）になって死ぬ「腐蛆病」と、幼虫がミイラ化して

さらに、培養液を砂糖液に混合して与えた成長促進への影響でも、2カ月後にはミツバチの増加傾向が確認された。ヘルペスなどのウイルスへの感染抑制の機能もあることが分かった。

新種細菌について前田教授は「伝染病予防だけと思っていれば、意外にもストレス軽減やウイルス感染抑制の機能もあり、自分でも驚いている」と話す。



発行所 日本農業新聞
〒110-8722 東京都台東区秋葉原2番3号

©日本農業新聞2009

2009年（平成21年）

7 1

水曜日

日本農業新聞